

---

# 台風のは中心は.....

はちろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

台風の中心は……

### 【コード】

N6314N

### 【作者名】

はちろう

### 【あらすじ】

涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作作品。古キョンBL。孤島症候群余談

<http://nk.syosetu.com/n6337n/>  
『レプリカ』

【1】

《孤島症候群余談》

「そんな所だと思ったぜ。ハルヒだって、本気で人死にを望んでた訳じゃない」

「まさか貴方に見破られるとは思いませんでしたよ。どのあたりからお気付きでしたか？」

俺の素人にしては見事な探偵ぶりを披露してやると、古泉はいつものように……ではなく、ちょっと悔しそうな笑みを浮かべた。

「多分最初から。第一ヒントが多すぎる」

俺ごときが簡単に見付けられる矛盾が、ありとあらゆる場所にばら蒔かれ過ぎていて、それがまた怪しかった。

まったく、ハルヒのせいで無駄に頭を使ってしまった。

せっかくの夏休みだと言うのに、とんだ茶番だ。

「あー疲れた。さて、と。謎も解明した事だし、風呂にでも浸かってくるかな」

ハルヒに台風の中連れ出されたためか、身体がじめじめしているような感覚がある。バスタオルごときでは、まったく拭い切れそうに無い。

まあ、びしょ濡れになるだけになって、その行為も徒勞に終わった訳だが。

「僕も御一緒させて頂けませんか？」

古泉はベッドから立ち上がると俺の服を掴んだ。

「ダメだダメ。お前は今言った事を全部ハルヒに説明するという任務があるだろ」

その手を払い、ぴしゃりと俺が言ってやると、古泉は「……………」と三点リーダー×3で返しやがった。

「説明が終わったらいいですか？」

少し間を開けて条件を見付け、尚も食い下がる彼に、呆れた目を向ける。

ダメと言って、お前が俺の言う事を聞いた例があるか？

十発十中聞いてないだろうが。

沈黙を肯定の意と捕らえた古泉はニコニコと心から嬉しそうに微笑むと、「ゆつくり入っていて下さいね」とだけ言い残して、部屋から駆け出ていった。

なんだかな。やれやれ。最近の古泉は何かがおかしい。こんな劇よりも、古泉脳内の方がよっぽど難解だ。

ハルヒもよくこんな変態を“謎の転校生”なだけでSOS団に入団させたものだ。

あいつは一体俺の苦勞をどれだけ増やせば気が済むのか。聞いたら凹みそうだから敢えて口を閉ざすがな。

増えるばかりで一向に減量する兆しをみせない精神的ストレスを少しでも強制的に吐き出すために、俺は風呂場に早足で向かった。

一人で風呂に入れた時間はほんの数分で、すぐに満面の笑みを浮かべた古泉が入って来た。

「お待たせしました」

「いや、全然待つて無いが」

いったいどれだけ簡略な説明を行なったのだろう。説明したがりのおかげに、そんなに俺と風呂に入りたいのか。

「はい。入りたいです」

即肯定すると、古泉はただっぴろい浴槽に身体も流さずに浸かった。まったく。どこまでも非常識な男だな。

「お前なあ。流せよ身体」

わざと手に持っていたシャワーを彼の顔に掛ける。

「わぶっ……ッ……何するんですかッ」

「別に。なんでこんなイケメンと野郎二人で風呂に入ってるんだろうな、と思っつてな」

しかも孤島の別荘のだ。

「イケメンって。僕は標準ですが……」

シャワーから逃げた古泉が、息を整えながら呟く様に言う。

「……それは俺を怒らせたから言っているのか？それとも、悲しませたいのか？その両方か？」

俺が嫌味Maxで古泉を睨むと、彼は首をブンブンと左右に振ってものすごい早口でまくし立てた。

「決してそんなことはツ……貴方を悲しませるなんて、済みませんでした。僕は無意識で酷い事を……僕としたことが……ああ、あのどうしたら許してくれますか？」

どうしたらって。  
俺が知るか。

やはり、どこか古泉はおかしい。この孤島に来てからと言うもの、その、なんと表現すべきかな。暇さえあれば、いや無くても古泉は俺のバツクをキープしているのだ。

バツクどころか、そうだな、まず俺の視界からいなかった事が無い。唯一離れたのは、あの茶番の終盤の一時ぐらいだ。

なのでここ何日か俺はオールウェイズ古泉のスマイルを拝んでいる訳で。ああ、何故だろう……寒気がする。

それから、もう一つ。これが一番重要だ。

【2】

そういう全ての古泉の挙動を統合するに、奴は完璧に俺の事が好きだ。それ以外考えられない。

でなければそのへんに転がっている平々凡々な男子高校生の俺なんかと風呂なんぞ健全男子なら入るうとは思わないだろう。

「あの……」

「あ？ああ。なんだ？」

「いえ。何か考えていらっしやっただので……」

古泉は曖昧に笑うと、俺を見た。

「物憂げな表情をしていたので少々心配に」

物憂げ、ねえ。

俺は聞こえるように呟きながら、シャワーを頭の上からかぶった。それから手のひらにシャンプーを広げ、髪を洗う。

少しして、古泉が湯船から上がり、俺の隣りに腰を下ろした。

奴も、身体を洗い始めたのが気配で分かる。

「なあ、古泉」

「何でしょうか」

「お前、彼女とかいるのか？」

少し唐突だっただろうか。まあいい。動揺する古泉も、なかなか見れないからな。

「ええッ!？」

「どこから声出てんだ。お前」

冷静に突っ込むと、古泉は小さく息を吐く。

「済みません。取り乱しました。いえ、あまりに貴方らしくない質問でしたので」

俺はシャンプーをシャワーで流して顔を上げ、古泉を横目で見た。そして思わず俺は固まる。

さっきまで目を瞑っていたため分からなかったが、古泉は熟れ過ぎた林檎以上に両頬を染めているのだ。

さて、この状況。一体どうしろと？

「古泉……お前いつものポーカーフェイスをどこに落として来たんだ」

目を見張る古泉の姿に呆れた俺はふん、と鼻を鳴らしてから湯船に入り込んだ。

「お前は相変わらず回りくどい。素直じゃないと、好きな奴に嫌われるぞ」

わざと気付かないフリして俺は視線を逸し、言葉を続ける。

「その女の子……いやお前年上とか好きそうだな。その女性とやらは恐らく素晴らしいボディの持ち主なんだろうな」

古泉は返事をしないで、少し怒ったような瞳を寄越した。

「ああ、SOS団に男の入団を切に願った俺だが、こいつも劣等感を

刺激される結果になるうとは」

あえて意味深に声を作ると、とうとう古泉が意を決したのか、身体に付いた泡をシャワーでザッと流すと「横、いいですね」といつものスマイルで言った。

静かに浴槽に腰を降ろした古泉は、湯船からはみ出していた俺の手を取ると自身の頬にヒタリと付け、不安そうに俺を見る。

「気持ち、悪いですか？」

いつもなら“気色悪い”だの“変態”だの言っただけの払いのけるのだが、こんな弱った表情の古泉は初めてで、それが出来ない。

俺を掴んでいる古泉の指先が小刻みに震え、また返事をしない俺を映す瞳が、冷たい冷気を帯びる。

「返事も、したくありませんか？」

尚も沈黙する俺に、古泉の顔は泣きそうになる。

おいおい。シャレにならんぞ。こいつ、本気で俺の事……。

「好き……貴方が……」

古泉はうつむいて、ポツリと零し何を思ったか、彼はそうだった動機を独り言のごとく漏らし始めた。

「一緒に居れば居るほど……貴方が涼宮さんに選ばれた理由が分かっただけなんです。貴方は文句は言うのにいつもいつも彼女の無理難題を攻略して……その姿がとても……健気で、美しく……」

「だって言う事聞かないと世界が崩壊するだろ」

いきなり口を開いた俺に古泉は顔を上げる。

ホツとしたような、だがやはり悲しみに浸った表情で、「そうです」と言った。

「貴方は彼女の所有物だから」

「長門みたいに言っな」

「ああ、すみません……ですが」

古泉はそこで一旦言葉を切ると、突然俺の上に乗り上げて唇に生暖かいそれを押し付けてきた。

だがそれは一瞬で、古泉はまた直ぐに離れて行く。

【4】

.....。

「.....じ、いず.....」

無意識に名前を口走ると、奴は水面に鼻がつくほど頭を下げた。

「すみません...すみません...僕は貴方が...どうしようもなく好きみたいで.....」

はあ。どうしてこうもハルヒが集めて来るのは世間一般からズレているのか。まあ、あいつが望んだからなのだが.....。天然エンジェル朝比奈さんしかり、有機ヒューマノイド別名宇宙人長門しかり。

そして目前にいるエスパ―.....ホモ古泉しかり。

「俺の悩みが底をつく日は死んでも来ないかもな」

「.....すみません」

しかし、自分で思うが肝が座ってるな。男にキスをされたというのに、動じない。

俺は軽く溜息を吐き、多分自らの突発的な行動を悔いているであろう古泉に言っでやる。

「取り敢えず、お前の気持ちは分かった」

「えッ！ひ、引かないんですか？」

古泉は破顔すると俺を抱き締めてきた。おい、まだ俺は何も言っていないぞ？

「何も言わなくていいですっ……………ありがとうございますっ！ぼぼぼぼ僕……………もう貴方に一生避けられてしまっつかと……………」

「今避けたい。おい、放せ」

風呂で、一体何が悲しくて男と抱き合わなければ行けないんだ。しかも、俺は認めるとは言ったが受け止められるとは言ってないぞ。

しかし古泉は首を左右に振るとゆっくり離れた。

「絶対に言わします」

「何を宣言しとるんだ古泉」

「んふっ。僕、頑張りますね」

「え……………ちよっと待て……………」

古泉は幸せを笑顔から大量に溢れさせながら、離れたばかりなのにまた抱き付いてくる。

「大好きです。キョン君」

「おい変態っ重……………ッウブッ……………！！！！！！！！」

あまりに奴が体重を掛けて来るので、腰が滑りお湯の中にガボツと沈んでしまう。

「わっ……！だ、大丈夫ですか……！！！」

「ブツ………ハア…ハア………お前、俺を殺す気か………！！！」

台風の中心は……ハルヒだと思っていたが、そうじゃないらしい。

【E C D】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6314n/>

---

台風の中心は.....

2011年10月8日00時12分発行